
新版「特務機動部隊シュガーエンジェルス」

神川綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新版「特務機動部隊シュガーエンジェルス」

【Nコード】

N4200J

【作者名】

神川綾乃

【あらすじ】

現在から近未来の世界を舞台にしたストーリーです。

序章

「覚えてるわよね…………あの頃の事。」

「あの頃って、いつ頃の事？」

答える男は、わざとらしく焦らして答えた。

「もう……………」

「あの頃の頃か、忘れる訳ないじゃないか？」

彼はあきれ顔の彼女の顔を左手に見ながら、グラスを傾けた。

「こうしてまたおまえと話すことが出来るなんて、夢にも思っていなかったよ。」

「…………夢……………」

隣に座る彼女も、彼と同じように両手で持ったグラスを口元に運んでいく。

「で、今は何をやってるんだ？」

「今は、一人の教師に過ぎないわよ。」

整った顔立ちなのに無精ひげの男と、長髪の美女。暗がりのカウンターで二人で飲んでいるその姿は、周りには不釣り合いに見えた。

「そっか……………そうだな。」

彼女に相づちをする彼。そして、彼女がカクテルグラスから口を離すと、わずかにダークレッドのルージュがグラスに残った。

「今は、これで良かったって思ってるわ。あれからもう十年は経つのよ。」

「ああ……………こうして酒を飲めたのも良かったもんさ。」

彼はそういうと、ストレートのバーボンを飲み干した。

彼らが出会ったのは、二人がまだ中学生になって間もない頃。それは第三次世界大戦の前だった。

「なあ、いまでもまだあの仕事してるのか？」

「だから、言っただでしょう？今は一人の教師に過ぎないって。」

彼の質問に、彼女は少し言葉を選んで答えていた。

「おまえさ、有名人じゃん。でもさ、同じ名前だったし……………まさかなあとは思っていたけど、それがマジだったなんてさあ。」

「わたしは雅、^{みやび}雅じゃないんだから。」

「ふーん……………」

「あら、疑ってるの？それに今の私は柏木よ。結城じゃないんだし。」

「ああ、そうだったな……………」

「昔の事よ。戦争も終わっているんだし、私はもう切れたのよ。」

彼女はそう言っていると、黒の革製のポシェットからシガーケースを取り出した。

「ん？おまえ煙草吸うんだ。」

「普段はあまり吸わないけどね。こういう時は吸うのよ……………」

彼女はそう答えると、細長い煙草を一本取り出した。

「新しい任務は、この女についての周辺調査だ。」

何枚かの写真と、十数枚に及ぶ彼女に関する資料を前に、二人の男が立っていた。

「これは……………」

机の上に置かれた写真と資料を、任務を任された中司が手に取った。
「柏木雅、海軍の元軍人。第一艦隊第十六大隊麾下の特務部隊の隊長にして最終階級は少尉……………」

中司が資料に目を通していている。彼の目にはこのような線が細い女性
が、本当に軍人であったのかどうか疑問に見えた。彼の上官は言った。

「君も知っているだろう。前の戦争で首都圏の空爆を阻止したと言

われている部隊の隊長だ。本当なら英雄に等しい人物なのに、表彰すら受けていない。詳しい事は、以前分らないままだ。」

「ええ、この噂は知っています。しかし、この部隊はもう解散したのではないですか？それに、第一六大隊といえば横須賀の研究機関ですね。そのような人物がなぜ実戦に？」

「確かに、部隊は解散しただろう。ただ、当時の将兵のほとんどが生きている。それに、海軍が開発していたというのは、人の形をした汎用兵器だと言うではないか。」

「それは幻ではないですか？」

中司の疑問の問いに、上官は言った。

「だから、それが知りたいのだ。上層部は、少なくとも今でも海軍がこれの開発を進めているのではないのかと思っている。」

「それで……私を？」

「君とこの女……柏木雅……いや、結城^{まこと}雅との関係は調査済みなのは知っておろう？」

上官のその言葉に、中司は答えることは出来なかった。

「ここがあいつが教師をやっているっていう学校か。ずいぶんと立派なもんだな。」

中司は任務のため柏木^{みやび}雅が現在教師として教鞭をふるっている、神奈川県横浜市の私立学園に潜入することになった。同じ、教師として。その陰には、中司が所属する組織の力がある。私立学園の教師として潜入するのは、たやすいことであった。

そして、新任の教師と言うことで校長と教頭に連れられ、はじめて職員室に入った時そこにいたのが、あの結城……否……柏木雅だった。「おはようございます。そちらにいらっしゃる方は失礼ですけど？」

彼女はいくつかの茶封筒を両手で胸に抱きながら話す。

「ああ、柏木先生。おはよう。こちら来週から当私立学園で教鞭をふるって貰うことになった、中司真也先生です。専門教科は……。」

「

校長は、言葉を詰まらせ、中司の顔に視線をずらす。

「はじめまして。中司です、専門は英語です。」

「そうそう、中司先生は専門は英語ですな。こちらは、柏木雅先生、1年部の英語を担当してもらっています。」

校長が柏木の簡単な紹介を続け、一息つくと、今度は教頭が、

「中司先生にも、柏木先生と同じく1年部と2年部の半分のクラスの英語を担当して頂きますので。」

「はい、そうですね、わかりました。よろしくお願いいたします。」

中司はそう言いつつ、左手をすつと柏木に差し出した。

「こちらこそよろしくお願いいたしますわ、中司先生。」

するとごく自然に柏木は左手を差し出し、握手を交わした。中司の手に、柏木の感触が伝わってくる。それはたしかに大人の女の手、細くてしなやかな感触。柏木の爪には、薄いピンク色のマニキュアが施されていた。

「それでは、参りましょう。他にも案内する場所がありますから。」

校長に促され、教頭と中司は職員室から出て行く。

「……………中司真也……………、まさか……………ね。」

職員室に残る彼女の口から、小さな声が漏れた。

「まさかあの時は本当に真也君だとは思わなかったけれど。」

「はは……………ひどいなそりゃ。」

中司の新任歓迎会の三次会を、柏木が良く行くというバーで二人、という訳である。

「それにしても……………?」

「それにしても?」

「結城、本当に女になってたんだな、お前……………」

美しい高めの声。長く伸びる黒髪はストレート。口にはダークレッドのリージュ。赤いタイトなスーツは、彼女の丰满な胸を主張する。スカートはミニスカートで、伸びる足にはダークブラックのストッキング。そして、黒い色のハイヒール。肌の色は透き通るように白く、かなりのレベルの美女である。

どこをどうみても軍に入隊が決定し、別れた時のあの頃の面影はどこにも見あたらない。

「あら……………いろいろ大変だったんだから。真也君、貴方も私みたいに女になればよかったのかしら？」

「あはは。それは勘弁してほしいな。」

「でも、一度くらいはアレとか体験してみれば女の気持ち、わかるんだから。」

「そう？」

「そういうもののなのよ。言ったでしょ、人は十年も経てば変わるって。」

「そう……………かもしれないな。」

「だって、真也君。あの貴方がうちみたいな学校の教師でしょ？貴方も、人のことなんて言えないんじゃないやなくて？」

「そうか、そういうものかな。」

「きつと、そうなのよ。」

二人の三次会はどうして、夜遅くまで続いていた……………

第1話 『時は2013年2月』

「今日から、この学校で皆さんに英語を担当することになった中司です、よろしく。」

翌日。火曜日には行われない臨時の朝礼が行われていた。新任の教師の中司真也を紹介する為だった。

彼は、体育館に集まっている中等部の生徒たちを前にステージの壇上に立って話している。その様子を、二日酔い気味になっていた雅も他の中等部の教員たちの列で聞いていた。『本当に”教師”としてここに来た…… 本当に分かりやすいわ……』

ズキズキと痛む頭でも雅は中司の様子をしっかりと見つめている。彼女と彼の間には、複雑な過去があるのだから。

朝礼が終わった後、その日は月曜日の朝礼と同じ時のように朝のホームルームは無く、そのまま一時限目の授業が始まる。

「それでは行きましょうか…… 中司先生。」

職員室では雅の正面の位置に席を与えられた中司を見てそう言った。『柏木先生、今日から本当によろしく願います。』

中司はなんとなくわざとらしく答える。雅の本名を知っているのは、ここには彼しかいない。二人は職員室を出て、中等部の教室棟に向かって歩き始めた。

「それにしてもさ、本当にここって女子校なんだよな。しかもお嬢様ばっかりってやつ？」

「決まってるじゃない、ここは女学院なんだから。」

「雅、お前もこのOGなんだろ？」

「なんでそれを知ってるのよ？」

「学園長に聞いたのさ。」

当たり前のように答える中司に、雅は怪訝そうな視線で言った。

「……とにかく…… 学校ではちゃんと話さないよ。」

話の内容はともかくとして、あまりに馴れ馴れしい彼の態度に雅は憤りを感じている。二人の関係から自然とそうなるのかもしれないけれどとは思った彼女ではあったがここは職場、しかも女学院の名が付いている、そんな学校なのだから。

『先が思いやられるわ』

雅はそう思った。

それから数分も経たないうちに、二人は教室の入り口の前にいた。「ここが、今日から副担任を務めていただく事になる1年A組。」なるほど。

雅の説明に、あっさりと切り返す中司。

「じゃ、入るわよ。」

雅はドアに手をかけると、1年A組の教室に入ってしまった。

その時、彼女のコミュニケーションータに情報が表示された。

”どう？学校の様子は。中司君の事だけど、やっぱりその通りよ。十分気をつけて。”

『って、なんてタイミングで……でも情報ありがとう』

雅はそう思いつつも、普段の様子でそのまま教壇に上がった。

第1話 『時は2013年2月』

「あ、真也から？」

僕はコミュニケーションータへ回線をつなぐように念じる。すると、瞬間的に目の前の勉強机の空間に映像が表示される。

「何、真也？こんな時間にめずらしいじゃん。」

「おいおいお前、なんて格好してるんだよ。」

風呂から上がって間もなくのコール。そして、相手が真也だったか

ら僕は回線を開いたのだ。まだ、上半身は裸のままだ。

「悪いね、今風呂からあがったところでき。で、どうしたん？」

僕は背後にある箆笥からＴシャツを一枚取り出す。

「ああ、今日俺のところにも届いたぜ。」

「あれが？」

「おう。で、お前は どうするんだと思つてさ。」

「うーん、まだ決めかねてるんだ。」

僕はＴシャツを着ると、勉強机の椅子に腰掛ける。真也はというと、あいつはベツトに座りながら僕にコールしたようだ。背後には、車のポスターが貼られているのが見えるからだ。

「戦争つていつてもさ、僕らは最前線に出る訳でもないしさ。」

「まあ、それはそうだけど。でも日本だって、こうなつてくると、いよいよつて感じがしなくもないか？」

「ああ、確かにそうかも知れないけどさ。」

「いま、まだ不景気なわけだしだからと言つて選んだ大学も、適当に選んだんだしな。どうするかな。」

「僕は、ゆつくりと考えてからにするよ。両親や妹のこともあるし。」

「そつか、そうだよな。」

「じゃまた今度。わりいな雅。」

真也は、そう言つて軽く左手で敬礼するようなポーズをしながら回線を切つた。

僕と真也は、大学への進学が決まつている高校３年生。しかし世の中は、朝鮮半島で再び始まつた戦争を契機に、中国が台湾に侵攻し、中東ではイスラエルとパレスチナの勢力が戦っている。後世の歴史が言う、世界は”第３次世界大戦”といわれる状態の中にあつた。そして、日本も例外ではなく、自衛隊から再び軍組織に戻された新・日本軍が、さかんに新卒兵などの募集を行っている。

僕や真也のところにも、例外なく軍から募集の案内書が郵送され

ていた。高校の他の友達のところにも、届いていると聞いていた。日本はアメリカやEUと同盟関係にあつて、戦争はあくまで有利に傾いていた。というか、石油や食料品などの物価は多少あがつてはいるけれど、あまり平時と変わらない状態が続いている。過去の第2次世界大戦の頃の日本では無いことは明らかだ。

翌日の学校の2時間目。もう2月も19日。卒業試験も終わり、あとは卒業までの思い出作りの学校。授業もないし2時間目と言つても、ただ教室でクラスメイトと話をすることが中心。しかし、男子生徒の間では軍から届いたパンフレットの話が持ちきりとなっている。

僕と真也も例外ではなく、

「まあ、試験くらいは受けてみてもいいかもしれないとおもつてさ。」

「雅、おまえ……………」

「ああ、あくまで試験くらいはだよ。僕みたいな体してるのが、軍隊で雇ってくれると思う？」

「まあ、確かにそうかも知れない。」

真也は、妙に納得したような顔をしながら、僕の体を一目見る。身長162cm、体重47kg。女子と比べてみても、あまり変わらないくらいの高さ。

「雅、おまえが受けに行くつて言うのなら、俺もつき合つてもいいぜ。」

「そう？じゃあ、明日にでもつきあつてよ。」

「明日？ずいぶんと急じゃないか？」

驚く真也に僕は、

「うん、ほらここみてよ。」

とパンフレットを開き、あるページを左の人差し指で示す。

「ああ、何？この地域の体験入隊検査日？確かに20日だな。」

「そうでしょ。高校ももう終わりだしさ。来なくたっていいわけだ」

し。」

事実、教室を見回すと三分の一くらいのクラスメイトは、登校してはいないように見える。朝の、出席調査も飛ばされているくらいだ。「だからさ、行ってみない？」

雅は、真也に押され気味になり、

「あ、ああ………わかったよ。」

と、答えた。

「それにしても、すごいサンプルが採れました。この結果見て頂けますか？」

「ん？結城雅………高校3年生。」

検査員と、その検査員が敬語を使い話している相手は、見た目では年齢はまだ小学校高学年くらいの年の少女だった。

「………なるほど、この結城雅という少年は、異常なまでに脳波が特殊だつて事だな。」

それは、雅の脳波測定の結果であつた。わずか10分間という短い時間の結果ではあるが、ある特異点が観測されている。

「これは、詳細を検査する必要があると思うのだが………。」

少女は、雅の脳波が記録されているロール紙を眼を細めて読みながら、そう呟く。少女のそのあどけない姿からは、出されるような口調は無かった。そもそもその少女は、男物というよりは、少年が着る服を着ている。その胸は僅かに膨らみかけているようにも見えるいるにもかかわらず。

「主任、どうしたのですか？」

真剣にロール紙を読む姿を見て、検査員とは別の、まだ20代前半くらいに見える女性が、背後から話しかける。彼女は白衣を着ていて、すっかりメイクもしている若い女研究員と言った風貌だ。

「ああ、松岡君か。まずこれを見てくれないか。」

少女は振り返り、ロール紙を松岡に見えるようにする。

「ここなんだが。」

少女はロール紙のある一カ所を指さした。

「クシー波ですか？」

「ああそうだ。ここなんだけどな。」

「こ、これは……………」

松岡は、そのロール紙を読みながら驚きの言葉を発した。

「そうだ、そういうことだ。分かっただろう？」

「これは、つまり……………」

「ああ、初の真の適合者かもしれない、ってことかもしれないな。」

「確かに、そのようですね……………」

少女と松岡はお互いの顔を見ながら話す。

「ただな、分からないことがあってな、この結城雅という高校生、男なんだよ。」

「え？男？」

「そうだ。」

松岡は眼を丸くする。二度も驚きを覚えた。

「つまり非常に貴重な逸材、絶対に検証しなければならないってことさ。」

「そうですね……………」

21世紀になり、脳波による電子回路の直接制御の技術が導入されはじめたが、現在では一般民生品にも、様々な分野で活用されている。

そして、さらなる研究の結果、発見されたのがクシー波である。

この脳波は、女性にしかみられていないと言われる脳波で、男性から発見されたのが、知る限り今回が初めてである。

クシー波は、どの脳波よりも意識して明確にコントロールできる脳波で、その意味でも、軍事的な目的で利用できる可能性があった。兵器に対して、人が物事を判断し、手と足で操作する以前に、脳波でコントロール出来れば、正確にしかも比較にならないほど速い速度で反応することができるのである。

「しかも、この高校生のクシー波の脳波レベルは、一般女性の平均の3倍を超えている。何も訓練もせずに、平常時にだ。わかるだろう？」

「はい。」

「つまりだ、この高校生にはとてつもない可能性がある、と言ったのだ。」

「それは、分かりますが……。」

「とにかく、何としてでもこの高校生の調査を行うようにするのだ。」

「はい、分かりました。」

困惑していた松岡も研究者の一人である。主任と呼ばれている少女の言葉に、強くうなずいた。

2月27日。雅と真也は、1週間前に興味本位で受けてみた、軍の適性試験の中でおこなれた、健康診断の結果、健康的に問題があると指摘された。本格的な精密検査を受けるために、東京のある大学病院に来ていた。

「それにしてもさ、おかしくないか？」

検査の前に、更衣室で検査用の服に着替える二人の会話。

「何が？」

雅が真也の問いかけに、そう答える。

「この検査、全部軍が費用出してくれるって言うんだぜ。何か変じゃないか？」

「気にすることは無いと思うけど？」

二人とも、それぞれ服を脱ぐその様子は、別室からモニタで監視されていた。その並べられたモニタの前に、少女と松岡の姿があっ

た。二人が話している会話の内容も、しっかりと記録されている。

「無理もないというところでしょうか。二人には悪いのですが。」

「ああ、すでに極秘事項だからな。」

モニタの前で、二人の会話を聞きながら、少女と松岡は話していた。

「検査着にも、盗聴器が仕掛けてあるのですよね？」

「ああ、そうだ。」

松岡の問いに、少女はぶっきらぼうに答える。今日のその少女の姿は、ピンクのロングワンピースに、赤と緑のチェックのヘアバンド。短い白の靴下と、ピンク色の靴を履いている。

「それにしても松岡君。なんでこのような格好をしなければいけないのだ？」

「仕方ないでしょう？そのような格好をしていただかなければ、逆におかしいですから。」

「まあ、確かにそうなんだが。」

「主任、このような事をなさると決めたのは、主任なのですから。」

「ははは……。」

その少女の笑い声は、乾いた声であった。

第2話 『接触』 (Part - A)

第2話 『接触』

険しい表情をした雅の両親と彼。そしてテーブルをはさんで、こちらも険しい表情の若い女性の二人組。

「……………」

重苦しい雰囲気にも包まれていた。ソファーに腰掛ける長髪の若い女性2人は着ている服、メイクやヘアースタイルも違う。一見しただけでは分からないくらい似ている彼女たちは双子の姉妹で、海軍の研究者だという。

彼女たちが雅の家を訪れる数日前、海軍の横須賀基地に所属しているという若い女性の声で雅の家に電話があった。なぜ全く関係のない海軍が突然連絡してきたのか？それも不思議でならなかった。電話を受けたのは雅の母で、最初はかなり不審に思ったと話していた。

「海軍の方々がうちの息子をほしがるのか、あなた方のお話では到底理解することも出来ません。」

雅の父親が言った。

「いきなりこのようなお話を伺っても困ります……………」

母親も、やはり同じ考えのようだ。両親に挟まれて座っている雅は、ただその様子を見ることしか出来なかった。

「理由も無しに、なぜ息子を軍隊にやらないといけないのですか？日本は軍を復活させたけれど、このような事は無いはずですよね。」父、雅彦は冷静に言った。若い研究者の二人である姉妹の方は説得に苦慮していた。関わっていることが兵器利用を前提とした新技術の開発という軍事機密である以上、海軍が雅を欲している理由を話

すことは出来ず、どのように説得するか迷っていた。

「……………それにあなた方は、こういう席の場においてもPCSを使っておられるようだ。無礼ではありませんか？」

こうして、海軍による最初の”説得”は失敗に終わった。

「本当に海軍の人たちが来たわね。」

母・美也子が心配そうな顔をして言った。

「海軍という割には女連れか。」

「あなたつたら——！」

「そんな事はともかくとして……………雅、本当にお前は何も知らないんだな？」

「うん、話したとおり体験入隊はしたけど……………海軍に入るつもりなんて思ったこともないし。単なる小遣い稼ぎのつもりで行ったのに。」

確かに雅と真也は帰り間際に交通費と併せて6000円近くを支給されていた。でも、彼にとっては小遣い稼ぎのつもりだった。このことを真也には話していなかったから、このような小遣いがあるのを知った真也はビックリしていた。

「うゝむ……………」

雅彦は腕組みをして少し考えこんだが、息子の話を聞く限りでは間違いをしていないようだし怒る理由もない。海軍の人間が本当にやって来たことに、さすがの雅彦も困惑せずにはいれなかった。

「海軍中尉と少尉か……………」

どう見てもそのようには見えない二人という印象が、雅と両親に強く残った。

説得に失敗した海軍ではあったが、

結城家には24時間体制で海軍の工作機関による監視がなされるようになっていた。

3月4日

結城家の玄関から一人、誰かが出てきたのを見て言った

「監視するのは……………あの女の子か？」

L96A1（スナイパーライフル）の照準^{スコープ}で見ている工作員の姿があった。

「結城雅、今年高校を卒業。」

その隣で双眼鏡で同じ方向を見ている彼の相方の工作員が答えた。

「雅^{まさ}だつて？ 雅^{みやび}だと思つてたよ。かわいく見えるのに。」

「まー、確かに女の子に見えなくも無いけどな……………」

「雅^{みやび}なんていう名前、軍のお偉方の令嬢かと思つてたけど違かつたな。」

海軍はいくつかの柏木家のそばの空き屋やワンルームマンションの空室を探し出した。そして、その空室を海軍が偽名で借りているその部屋に彼らはいた。

「本当は女の子だつたりしてな。俺たちみたいなのに監視警護させる位だしさあ。」

「ははは……………つていうかさ、お前……………それ（L96A1）で覗くのやめろよ。俺たちは狙撃^{スナイプ}しにきたんじゃないんだぜ。」

「そうなんだけどさ。おっと、報告しないと。」

彼はヘッドセットの無線機の電源を入れると、こう言った。

「こちらイーグル。ターゲットは徒歩にて自宅を出発、A地点を右折した。」

すぐに、

「アルバ了解」

「フォックスラジャー」

「コブラOK」

と、配置された作業員たちが無線で呼応した。

第2話 『接触』（Part-A）（後書き）

P C S : P e r s o n a l C o m m u n i c a t o r S y s t
e m

裸眼に直接装着するコンタクトレンズ状のディスプレイに情報を投影表示し、脳波によって直接コントロール無線などで外部とアクセスするシステム。本体の大きさはマッチ箱2つくらいで、使用する本人から数メートル以内の位置にあれば問題なく動作する。ノ一般民生レベルまで普及していて、携帯電話や主要なモバイルデバイスの代替えとなっている。高速なネットワークに接続できる。一部の施設やTPOに併せて利用できないようにする信号を受信した場合、大幅にその機能が制限されるようにするよう出来ることが義務づけられている。コンタクトレンズ状のディスプレイのものは、目の疾患・視力に問題のある人は利用できないため、メガネ・ゴーグルに液晶表示するタイプの物や、空間に投影するタイプの物などが存在している。本作に登場している”コミュニケータ”とは、このことを言う。

第3話 『接触』 (Part・B)

雅は歩きながらPCSでやりとりをしていた。思い描いた事はすぐにPCSによって文字として変換されて、そして伝えたい相手に送信されていく。PCSでのやりとりの相手は、高校の同級生たちだった。

「今、家を出たよ」

「分かった」

PCSで、みんなが今何をしているのかはすぐに伝わってきている。あまり友達が多いわけでは無かったけれど、高校卒業を目前にして真也たちをはじめとする友達たちとカラオケにでも行こうと誘われていたから。

しかしこの日……約束の時間に、彼が友達たちと会うことはなかった。

「本当にやるのね。」

半ば呆れた声で、秋美が言った。

「仕方ないでしょう……命令なんだから……。」
分かった口調で、春菜は答える。

一台の黒いワゴン車が道に止まっていた。窓ガラスはフルスモーク。一般車両と同じナンバープレートが取り付けられているが、この車は海軍の工作用の車だった。その車の中で、双子の姉妹が話していた。

「こんな物は要らないけど……。」

「当たり前でしょ！」

春菜と秋美は、軍から支給されている拳銃ベレッタを腰のホルダーから取り出すと、前のナビシートに座っている男の工作員に手渡す。

「よろしいんですか？」

銃を渡そうとする二人に、彼は聞いた。

「相手は民間人の高校生だから……あなたたちも、穏便に済ませてください。」

春菜がそう言っていると

「分かりました。」

と彼は答える。

「暴れるような事はないだろうけれど、一応は気をつけて穏便にしてください。」

秋美がそう付け加えると、

「……分かりました……。」

と彼は答えた。

「ターゲットはまもなくそちらの前を通ります。」

他の位置で監視している作業員から無線で連絡が入る。

「あと10メートルほです。」

雅が角を曲がり、リアのスモークガラス越しにその姿が見えた。

「ジャマー入れて」

「了解」

秋美の指示に春菜は答える。春菜は自分のPCSを操作して、雅のPCSのシステムをアクセス不能にさせる妨害をした。

「あ……あれ？」

春菜と秋美たちが乗った車のそばで、雅が立ち止まった。突然、PCSの回線がすべて切れて、電源も切れてしまったからだ。こんな事はいままでに一度も起きたことはなかった。雅がポケットからPCS本体を取り出そうとしたとき、

「ごめんなさいね……」

と彼の背後が春菜がつばやき、彼の後頭部から首筋にかけてを右手

でチョップした。

「どう、彼の様子は？」

「まだ気絶してるみたいね。」

液晶モニタの前で、監視している部屋をみている姉妹がいた。

「もう2時間がたつわ。」

秋美が左手の腕時計をみながら言った。女性兵士用だから、すこしは華奢にはなっているけれど、それでも女性が使用するには無骨なデザインの軍からの支給品である。二人は拉致するために雅を気絶させたした後、直ちに車に雅を乗せ彼に鎮静剤を投与していた。

「おかしいわね……そんなに強力なはずは無いけれど。」

横須賀の基地に着いたのが30分ほど前のことだった。

「とにかく、彼が起きるのを待ちましょう。」

「ええ。」

時刻は、すでに正午を過ぎていた……

第4話 『接触』 (Part - C)

「……………僕は、いつたい……………？何があつたんだ？」

どれほど時間が経つたのだろうか。雅が意識を取り戻したその場所は無機質な白い壁に包まれている。各ベットを仕切るように設計されている、天井からの釣りカーテン。彼が横たわっていたベットは、病院で使われているような物だった。

この部屋には、彼以外にはいないようで、彼が使っているベットをあわせると5つおいてある。彼が使っている物だけマットレスの上にシーツが引かれていて、体には薄い毛布が掛けてある。

「病院……………？」

ベットに横たわる彼の体には拘束具などはついていない。雅は自由に体を動かせた。

「ん……………？」

彼は、上体を起こすと自分の状態を確認する。服に乱れはない。点滴もされていなければ、体のどこも今朝家を出た時と変わらぬ状態。「いつたい……………」

彼は何が起こったのか理解出来なかった。彼はベットから降り、何も体に痛みがないことを確認してから静かに立った。

「あの、誰かいますか？」

そこには診察用に使うのだろう医者用の机といくつかの薬箱、そして消毒液につけられた脱脂綿を入れたケースなどが見える。病院と言うよりは、学校の保健室のような場所のように雅は感じた。でも、四方を囲む壁には窓はない。

誰もいなかったので雅はその部屋から出ようとした。1カ所ある鉄の扉、保健室には似合いそうにない扉を開けようと、ドアノブに手を掛けた。

「ん、開かない？」

扉は全くの動かない。何度か軽く力を入れてみたが、ぴくりとも動

かない。

「鍵でも掛けてあるのかな。」

と、その時だった。突然その鉄の扉が右にスライドして開いた。

「うわっ！」

とつさに左手で持っていたドアノブを離す。ドアの向こうには数日前雅の家を訪れた、あの女が立っていた。

「お目覚めの気分はどうかしら？」

女は、雅のあつけにとられたその姿を見ながらそう言った。

「あ、貴方……確か、何日前に家に来ましたよね。」

女はその言葉に少しの間をおいてから、答える。

「……………覚えていてくれたの。」

「はい、たしか松岡さんでしたね。」

「あら、名前まで。」

「……………つて、ここはいつたいどこなんですか!？」

目の前の松岡の姿、見知らぬ保健室のような場所、そして何が起こったかわからない状況。普段はおとなしめの雅も、さすがに取り乱す。

「ここ? 詳しいことは話すことは出来ないけれど。大丈夫、今日中にはしつかりと家に送り届けますから。」

松岡は、あの時家で見せたのとはまったく別人のような表情だった。冷静で沈着、もしかしたら、冷酷で残忍とも思われそうな表情で答える。

「今日中に……………つて、いつたいどうということなんですか!？」

雅は大きな声で、松中に質問をする。

「あら、可愛い姿が台無しね。」

その声は小さな声で、激しさを増している雅には聞き取れない。

「はい!？」

「とにかく、こういう方法をとったのは謝ります。でも、ついてきなさい。結城君、貴方に会わせるお方がいるの。」

激しい雅、そしてあくまでポーカーフェイスな松岡。雅は、この人

には何を言っても駄目かもしれないと思い、素直に従うことにした。
「あ、そうそう。その前に……貴方のコミュニケーターは、機密上私たちが預からさせていただいています。」

「え……」

彼は釈然とはできなかったけれど、彼女にはおとなしく従うしかなかった。彼の直感が、そうさせていたのかもしれない。

医務室を出ると3分ほど、冷たいコンクリート製の打ちっ放しの廊下を歩いた後、2重の分厚い鋼鉄の扉によって保護されたある部屋に通された。途中、いろいろな部屋に別れているのだろう鋼鉄の扉が並んでいた。どうやら、普通の建物では無さそうだという事は、雅にも理解できた。

「結城君、こちらに来て。この扉の向こうに会っていただく方がいます。」

3枚目の扉は、今度は高級そうな木目調の戸だった。

「ここですか？」

「そうです。」

そう言うと、松岡はその扉を開ける

「さ、入りなさい。」

「はい。」

雅は訳の分からないまま、部屋に通された。その部屋は、あらがち普通の会議室、テーブルは円形で、それを囲うように10脚ほどの椅子が均等に並べられていた。

そして、そのテーブルの1カ所の椅子に、一人の色違いの日本海軍の軍服を着た少女が座っていた。軍服を着ているがその体格、顔立ちといった印象から、小学生くらいと雅は判断する。なぜ、このような少女が海軍の軍服、しかも見慣れない色の物を着用しているのかは、想像できない。

「ようこそ、結城雅君。」

会議室に入れられた雅の姿を見て、少女は立った。身長は、やはり

150cmくらいしかない。少女には女子の制服であっても、軍服は似合わない。そして、その少女からは、少女らしからぬ言葉が投げかけられてきた。

「いままでの君への無礼を許したまえ、私は日本海軍少佐、柏木正美だ。」

少女から述べられたその言葉に、雅は驚いてしまい、何がということなのかよく理解できない。

「え、あ、海軍少佐……………」

「そうだ。私は海軍の少佐、柏木と言う。」

少女はそう言うと言手をしようと言つのか、右手を差し出す。

「あ、はい。」

拍子抜けしてしまった雅は、すぐに握手に答えることは出来ない。

「あ……………」

そして、5秒ほど間を置いてから雅は少女と握手を交わす。雅の眼には、少女の軍服の襟元にある階級章、そして海軍を示す徽章、さらに見慣れないなにかのバッチ、おそらく所属部隊か何かを指し示す物が入ってくる。それは、彼にとっては目線は下の方にあつた。確かに、身長は150cm位だろう。

『海軍のパンフレットに書いてあつた……………確かに、この人は少佐の階級章を付けてる。このような娘が、どうして?』

そして握手を終えると、少女はコミュニケーション誰かと連絡を取ったようだ。

『この建物は、たぶん地下……………。どうしてコミュニケーションが使えるだろう?』

脳波でコントロールする携帯電子コントロールシステム、俗にコミュニケーションと呼ばれるシステムは、この時代珍しいことはなかった。このシステムは、人の意志によって起こる、脳波を感知して自動的に作動、そして音声やホログラフィーとしてその結果などを表示するシステムである。

しかし、電波の届かない地下では使い物にならないはずである。

このシステムは、様々な用途で使われているが、少女は、一般民生用のシステムに近い物を使用しているらしい。ほんの僅かだが、”NOW CONNECTING”という。3cm四方の小さな表示が、彼女の左目の10cm位の場所で投影されたのを、雅はしっかりと見ていた。

そしてその表示が終わると間をおかずに会議室に、松岡が入ってきた。今度は白衣を着ている。

「柏木少佐、お呼びにより参りました。」

「うむ。改めて紹介しよう、こちらが私の部下の松岡特務少尉だ。」

「初めまして……ではありませんね、結城雅君。よろしく。」

二人は、雅の目の前に並ぶがどうみてもおかしい。少女の部下が大人の女性、いったいこれはどうということなのだろう。

「は、はい。」

「結城君とは、一度結城君のお宅でお会いしましたわね。」

そして、松岡の雰囲気も医務室から会議室に来る時の松岡とは、ずいぶん印象が違う。言葉に、しっかりとした暖かさを感じる。

「それでは、そちらに腰掛けてください。」

少女はそう言うと、先に結城が席に腰を掛けるのを見てから自分も腰掛ける。そして、松岡も、腰掛けた。

「さて、さっそくだが……、松岡君、君から説明してくれるか？」

少女の口調は、あくまでも風貌にはあわない。

「わかりました。結城雅君、これからお話することは軍事上の機密事項になります。この様な事をお話するのは、貴方に力になってほしいからなのです。よろしいですか？」

「は、はい……？」

雅はその松岡の言葉に、そう応えることしかできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4200j/>

新版「特務機動部隊シュガーエンジェルス」

2010年10月11日16時25分発行